

十三度目の正直

死に戻りの冷徹公爵は悪役王子を死んでも離さない

登場人物紹介

ニコ

王宮で働く青年。
この物語の
『主人公』ということだが……？

コンスタンティネ

フセスラウ国の王太子。
美しく、誰からも愛される存在。

ステヴァン

隣国パルラディ国の王太子。

ユーリィ

フセスラウ国第二王子にして、
王宮唯一の葬儀師。
控えめで、国のためなら
我が身の犠牲を厭わない。

エドゥアルド

王太子と婚約している
美貌の公爵。
事故で命を落とした後に
奇跡の蘇生を果たしたが、
以前とは様子が異なるようで……？

第一章 想い人の死と蘇生と、秘密の戯曲

春の嵐の今日。

わたしの初恋相手であるエドワード・ミロシュ公爵が、王宮前で馬車ごと滑落して亡くなった。遺体を回収した洞窟管理役によると、つづら折りの山道でも速度を抑えた様子がなかったという。

「雨で視界も足場も悪いのに、なにをそんなに急がれたのです……？」

我がフセスラウ国の領土は、大半が山脈地帯からなる。王宮はその頂上に建つ。

平地が少ない分、洞窟を掘って政務や儀式の間を確保しており、部屋の半数は地下にある。そのひとつ、葬儀用の洞にて黒い式服に袖を通したわたしは、弱々しくつぶやいた。

「閣下」

もちろん答えはない。夜が来ても止まない雨音が、通気口から聞こえるのみ。

寝台に横たえられた公爵の長身瘦躯は、いつものとおり漆黒の、しかし湿って泥で汚れた礼服に包まれている。襟なし上衣と襯衣を突き破る、深い掻き傷が目についた。こめかみは赤紫色に腫れる一方、肌に生氣はなく、悪魔的とまで謳われた美貌は見る影もない。

二歳上の兄、コンスタンティネにはとても見せられない。

『公爵が、亡く、なった？ ユーリイ、嘘を吐かないで』

王太子として帝王学を叩き込まれてきた彼も、さすがに倒れてしまった。この雨期が終わり次第、兄と公爵は婚儀を挙げる予定だった。

わたしには倒れる権利も、ましてや涙を流す権利もない。

十年間、兄の婚約者に横恋慕していたのだから。

懐の万年筆に手を当て、奥歯を噛み締める。

（公爵のお身体に触れるのを許してください、兄上）

胸の裡で断りを入れてから、ひそかな想い人の手を取った。特別な葬送の儀式のために。

わたしの指よりさらに冷たい掌に、雲母を塗る。鉾物を砕いた白い粉だ。怜悯な印象の唇は、ゴムノキの葉で覆う。下腹部には器を置いて、羊の乳を注ぐ。

（安らかに眠れますように）

わたしは、王宮唯一の葬儀師だ。

傍系含む王族が亡くなった場合、同じく王族が葬送の儀式を行う、と四十四年前に定められた。手順もこのように平民の葬儀とは異なる。

忌み事ながら、第二王子の自分でもできるなら、と引き受けた。

（ただ、閣下を葬送する日はずっと先だと思っていましたが）

公爵は、八歳上のはとこに当たる。それぞれの祖父が双子の兄弟なのだ。

とはいえまだ二十七歳の彼を送る心の準備は、これっぽっちもできていなかった。

（もしかしたら、『始まりの魔法使いたち』が、兄と違つて国を統べる使命もないわたしを憐れみ、許されぬ恋と訣別できるよう与えてくれた時間なのかもしれない）

などと不謹慎な言い訳をしつつ、公爵の肩下まである黒髪に手を伸ばす。

血がこびりついた部分を丁寧にほどいた。夢想していたより、やわらかい手触りだ。

『私に気安く触れるな』

早春の、わたしの成人祝いの折り。「髪に糸くずがついている」と下心で手を出した婦人を、公爵はびしやりと退けた。

王族の血縁にして将来の王婿。彼の孤高な言動は、ときに周囲を凍りつかせる。

でもこの一件は、婚約中の兄を氣遣つてのことと、わたしにはわかった。

生前ならわたしも手を払われただろうか。なにせ、何者でもない第二王子だ。

（それでも、あの日のように魔法を使つて、蘇生できたらいいのに。……なんて）

壁の燭台の火が、不意に揺れた。

ぴくりと公爵の睫毛がわななく。薄闇の中でも蠱惑的にきらめく紅眼が、わたしを捉える。

「天使みたいな銀の巻き毛と碧い目、貴い佇まい。僕の推し、ユーリイ」

（えっ？）

亡骸が目を開け、声まで発した。

（な、なにが、起きたのでしょうか）

葬送していたはずだ。真逆の蘇生ではない。衝撃で固まってしまう。

それをいいことに、公爵は起き上がり、わたしを抱き寄せた。

わたしも平均以上の背丈があるのに、彼の長い腕にすっぽり包み込まれる。その手は熱く、あえかに震えている。

……そう、熱い。さらには脈拍も聞こえた。

(まさか。生きて、いる?)

「すう——」

公爵はわたしの混乱も構わず、思い切りわたしのうなじの匂いを吸い込んでいる。

依然声も出せずにいたら、その腕の力がわずかにゆるんだ。

至近距離で目が合う。常に威厳ある彼らしくなく切実で、溢れる愛を抑えきれず、どこか怖がっているようでもあり、諦念も垣間見える表情。

まったく別人に出会ったみたいに錯覚した。

「もうこうするしかない。……君は、一年以内に死ぬ。その悲劇を覆すべく、私の手を取れ」

続く台詞に、ますます面食らう。

(わたしが……死ぬ?)

普段と同じ低く鋭い声で断言された。一年という、妙に具体的な数字を添えて。

だがそれを言ったら。公爵こそ、死んでいた。

洞窟管理役も、侍医も、わたしも間違いなく確認した。

ごくりと唾を呑み込む。その彼が今、こうして動き、話している。可能性として考えられるのは、たったひとつ。

「……閣下。禁忌を、犯したのですか」

死者蘇生。すなわち、魔法を使ったとしか思えない。

我がフセスラウト、谷を挟んだ隣国パルラディは、『始まりの魔法使いたち』が拓いた国である。しかし両国は長い間、魔法戦争に明け暮れた。地も人も荒廃し、失うものしかなかった。

そこで四十四年前、先代の両君主——魔力に優れ、『始まりの魔法使いたちの再来』と名高い——が全員の魔力を封印し、休戦協定を結んだ。

以来、魔法は禁忌となった。

公爵は、その封印を解いたのか? いつの間に、どうやって、なんのために……

想い人が蘇生しても、無邪気には喜べない。答えによってはすぐ対応できるよう備えて待つ。

「禁忌、か。そういうことにしておこう」

公爵は回りくどく認め、口角を片側だけ上げて笑った。顔の腫れは引き、生氣と色気まで復活している。

場違いにも赤面する。未だ公爵と密着している。うるさい拍動が伝わってしまう。

離れようともぞもぞ身じろぐも、逆に抱き込まれた。

「今回も童貞公務員から悪役公爵に転生できた。すべてユーリイのためだ。ゲー……原作ではほぼ接点のない私たちが、私はもう君を喪いたくない。どうかそれだけは忘れないで」

(わたしの、ため?)

首を傾げざるを得ない。

公爵は、王太子の婚約者として国を治める意気に満ちており、第二王子のわたしには興味がないはず。そうして余所見せず使命に邁進する姿にこそ、惹かれたのだ。

(なのに、わたしを「天使みたい」とおっしゃったりして……聞き違いでなければ)

それに先ほどから、『オシ』とか『テンセイ』とか、意味不明な単語を口になっている。『悪役』や『原作』も、なにを指すのだろう。第一声は、一人称すら違った。

なにより、わたしが死ぬとは? 持病はないし、第二王子を暗殺したって仕方ない。

疑問ばかりが重なっていく。

「あの。わたしが死ぬとは、どういうことですか?」

「ここで詳しくは話せない。『二回目』の二の舞を演じたくはないゆえ」

こわごわ問うも、もっと翻弄された。

(……第二王子のわたしには、話す価値もないか)

それはそうと、公爵は怪我がすべて治ったわけではなく、服もぼろぼろのままで、痛々しい。

「ひとまず、侍医を呼びましょう」

気にかかつて追及を中断すると、公爵は一転、声を出して笑った。

「ふっ、ふふ。君は、ずっと、変わらない。優しく無垢な弟王子だ」

笑っているのに、泣いているようにも見える。

こんなふうに笑う公爵は、見たことがない。死者蘇生という大がかりな魔法の後遺症か。心配が募り、「安静にしてくださいね」と言い置いて、洞の扉のほうへ身体を向けた。

しかし今度は後ろから抱きすくめられ、踏み出せない。

「今、廊下に出てはいけない。ペトルと鉢合わせして、尋問される」

吐息ごと耳に吹き込まれる。思わず「あ、」と喘ぐような声が出してしまった。

「ペ、ペトルは兄専属の護衛ですよ。地下洞にいるはずがありません」

ごまかしも兼ねて早口で反論すると、公爵はわたしを解放した。

「ならば扉の隙間から確かめてみたらよい。くれぐれも先方に気づかれぬように」
名残惜しげに巻き毛を撫でた……と感じたのは、わたしの夢想のしすぎだろう。

半信半疑で両開きの扉に近づく。万年筆一本分だけ、扉をずらす。

(ほら、誰もいません。——いや)

足音が聞こえた。

わたしたち兄弟の幼馴染にして、精悍な日焼け顔の近衛騎士、ペトルが現れたではないか。

ペトルの大きな影が葬儀洞前に佇む。

わたしは咄嗟に息を止めた。彼に公爵の禁忌破りを知られてはまずいと直感したのだ。

影がゆらりと引き返していく。なんとかやり過ごせたものの、冷や汗まみれで振り返る。

「どうして、ペトルが来るとわかったのです」

近衛騎士の任務外の来訪を見事に言い当てた。公爵の言葉の数々が、一気に現実味を帯びる。

ふくらはぎが寝台の端に当たって、後ろ向きに倒れた。ぽふんと弾んだ身体を、公爵に押さえ込まれる。

公爵の手はひやりと冷たい。身を硬くする間に、上衣の腰紐を解かれてしまう。

『なぜだ？ 私はずっとこうしたいと思っていた』

わたしの肩に置かれた手が、鎖骨を辿り、罪を自覚させるかのごとく唇に達する。

『なぜって、それは』

がばりと跳ね起きた。

見慣れた刺繍寝具に、抽斗の二段目に錠のついた執務机。いつもわたしが寝起きする私室だ。

（――夢、ですね）

額に滲む嫌な汗を拭う。

公爵が蘇生した驚きと昂揚は、夜じゅう鎮まらなかった。そのせいか、とんでもない夢を見てしまった。

（こんな夢想、今日は特に不謹慎極まりない……）

きっちり留まった寝間着の腰紐にほっとする。

短く浅い眠りだったが、寝直せる気もしない。辺りはすでに仄明るい。寝台を降り、政務用の白い襯衣と薄灰色の上衣に着替える。

そこに、臨時議会の招集通知が届いた。

（これは……！）

露台から雨上がりの山林を望む暇もなく、石造りの階段を下りていく。

政務の間には、すでに貴族たちが集まっている。ほぼ、嵐で客間にとどまっていた面々だ。

両親と、両親に支えられた兄も到着すると、厳重に扉が閉められた。

「さて。昨日、我が従甥エドワード・ミロシュが事故により落命した報を受け取ったかと思う」

父王が長卓を見渡し、重々しく話しはじめる。

「しかし昨夜遅く、彼は生き返った」

「？ 『生き返った』とは……」

「死者蘇生魔法を使ったと思われる。ついでに、処遇を議論したい」

まさかの議題に、貴族たちに緊張が走った。末席のわたしも想い人を案じて指を握り込む。

表には出さないが同じく公爵の生死に一喜一憂の夜を過ごしただろう父が、続ける。

「みなも知つてのとおり四十四年前、魔法は禁忌として封じられた。ただ、禁忌を犯した際の罰は定められておらぬ。前例もない」

（当時の王――おじいさまは封印の解き方を口外せず、わたしが生まれた年に亡くなった……）

先代王による魔力封印は子孫にも及ぶ。非常に強力で、破られる想定をしていなかったらしい。

それを、将来の王婿が破ってしまったわけだ。

「禁忌を犯した者が政務に関わり続けるのは、いかがなものでしょうか」

真っ先に、宰相子息のシメオンが声を上げた。冷静な声色ながら、きちりと分けた濃金髪の下、鼻眼鏡越しの眼差しは各人を煽らんばかりだ。

孤高の公爵とシメオンは、友好的とは言えない。

「魔力の封印を解くなど、再びパルラディとの戦争を呼び込み、国を破滅させるも同然です」さらなる一言に、列席者が同調する。普段議論の中心的立場である公爵本人は客間で静養しているのもあり、「ミロシュ領で謹慎させては」「塔に幽閉したほうが」など言いたい放題だ。

わたしはおろおろと発言を追うしかない。

（みな、魔法で自領を脅かされないかと神経質になっているようですね）

なぜなら魔力は王族とその血縁のみが持つ。

元始、深い山林だったこの地を、今では『始まりの魔法使いたち』と呼ばれるふたりがその力で以て拓いた。彼らは、自分たちを頼ってきた人間を快く迎え入れた。やがて指導力のある人間の血に魔力源を刻み、統治を補佐させた。これが王族の祖である。

魔力を持たない貴族は、持つ王族に敵わない。魔法戦争となれば兵も資源も差し出すほかない。

「ミロシュ公がゆくゆく王婿の座に就くというのも、再考すべきかと」

それを危惧したのだろう、ついには兄との婚約にまで話が及んだ。

父の隣に座る兄の身体が、ふらりと傾ぐ。専属護衛のペトルがすかさず支えた。

めまぐるしい状況変化で体調が優れず、ではない。公爵は禁忌を犯したとて魔法を悪く使うはずがない、という義憤にほかならない。

「公爵以上に将来の王婿が務まる方はいらっしゃいません」

兄の凜とした一声に、政務の間は静まり返った。みな見惚れてすらいる。

まっすぐに艶がある、肩上で切り揃えられた銀髪。知性を宿した華色の瞳。純白の上衣が映える

繊細なつくりの骨格——美女も恥じらう、フセスラウきつての華。

彼自身、身内のわたしから見ても次期王に相応しい清廉な人だ。

『せっかく王ぞくに生まれたのに、魔力をつかえず、残念ですね。五十年くらいはやく生まれていれば、この書物のように魔法でみなを驚かせたりできました』

『魔法はなにかを奪ってしまうこともある。だから封印してよかったんだ。おじいさまは賢明な判断をなさったよ』

幼い頃、書庫洞でそんな会話を交わした。

秘めた力に誘惑されない兄は、恋心との訣別という口実で公爵に触れたわたしとは、違う。

「……昨夜の、ミロシュ公は、」

わたしは完全に引き立て役になりつつ、硬い声で切り出した。

「仮死状態でした。葬送の儀式中に意識を取り戻されたのです。よって、禁忌を犯したわけではありません」

昨夜、葬儀洞で公爵に頼まれたとおりの証言を。

『明日だが、私の処遇についての議会が開かれる。君が「仮死状態だった」と言ってくれば問題ない』

公爵はペトルの葬儀洞来訪に続き、臨時議会招集も言い当てた。

それでいてこの場に不在なのは、魔法で回復したのではなく依然大怪我だと示すためだ。

(実際は蘇生魔法ですが)

嘘を吐くのは憚られるも、公爵が謹慎や幽閉に処されるのは避けたい。

それに禁忌を犯したのはわたしのためだと言ったところで、誰も信じないだろう。

これは「次期王の弟」として模範的な援護でもある。兄の表情がみるみるほころんだ。

「失礼ながら、殿下は共犯ではございませんか」

「とんでもない。わたしも魔力を解放していたとしたら、もっと兄を補佐できるでしょう」

シメオンの追及も逃れる。第二王子が禁忌破りなどという大それたことをすると思う者は、ひとりもない。わたし自身さえ思わない。

「それなら、議論の必要はありませんでしたわね。ただし」

そんな自嘲に沈むわたしに代わって、母がこごとと自慢の銀髪をなびかせ、注目を集めた。

「若い彼らの身にもなにかあるかわからないと、思い知らされました。ゆえに、コンスタンティネとエドゥアルドの婚儀を、来月執り行うことに致しましょう」

来月はまだ雨期だが、婚儀を早めたいという。

優雅な物言いにしても強引な話題転換だ。しかし、父も頷いている。それだけ後ろ盾を逃したくないとみた。

王族と貴族の違いは、魔力。逆に言えば、魔力を封印された現在の王族に、絶対的な力はない。魔法なしでも——実は前から使っていたのか——有能な公爵が、未来の王婿として政務の中心となってくれば、この上ない助けになる。

(いよいよ、このときが来ましたか)

胸がつきりと痛み、そっと深呼吸した。

公爵が生き返って嬉しいものの、生きているなら、彼は兄と添い遂げる運命だ。

かと言って、兄がいなければとは思わない。ふたりきりの大切な兄弟である。

兄より先に生まれていれば、とも思わない。支えるのが性に合っている。

そして。父が決めた相手ながら、国を背負う意気と能力を併せ持ち、非情ささえ装飾品にしてしまう美貌の公爵を、兄もまた慕っている。わたしはそれを誰よりよく知っていた。

いっそ兄が卑しい人間で、公爵につらく当たったりしていたら、わたしも野心を抱いたかもしれないけれど……

(兄上と公爵が、婚儀で永遠を誓う。それが、わたしの望む国の安寧につながります)

わたしは第二王子として、フセスラウの安寧をなにより望んでいる。

さまざまな葛藤を呑み込み、父に続いて頷いてみせた。

「エドゥアルドの怪我も、侍医によるとひと月あれば回復が見込まれるとのこと。異論はありませんか？」

母が最終確認する。公爵が禁忌を犯していないなら、誰も王妃に異を唱えようがない。

公爵に咎めはなく、むしろ将来の王婿の地位を強化して、散会となった。

(なんとか切り抜けられました)

胸の痛みはあれど、安堵も大きい。客間へ報告に行こうとする。

だが、母に「ユーリイ」と呼び止められた。

「婚儀の舞踏会で、令嬢たちと踊る気はありますか？ あなたは社交界で『戯曲が恋人』などと言われている、気がかりなのですよ」

戯曲、という単語にどきりとした。気取られないよう顔に微笑みを貼りつける。

これまで、公爵を想いながら他の令嬢と仲を深める器用さはなく、婚約者もいなかった。

しかし公爵は来月、正式に兄の伴侶となる。それなら。

「よい方がいたら、ぜひお声がけください」

昨夜の公爵はわたしを喪いたくなくと言ってくれたものの、わたしの生死と恋愛は別の話だろう。幾度となく味わった胸の痛みをやり過ぎ、背筋を伸ばす。

「わたしもフセスラウの役に立ちたく思います」

「まあ。でしたら、相応しい婚約者候補を吟味しましょう」

半分本音で半分暗示。母はそうと知る由もなく、華やかに笑った。

いずれ直轄領を継ぎ、次期王の統治を補佐し、国の安寧に寄与する——。それが第二王子であるわたしの最善の人生だ。

結婚も、国に資する家の令嬢とで、構わない。

『僕の推し、ユーリイ』

公爵の声が、暗示を解こうとするかのように耳によみがえった。

暗示は痛みの麻酔にもなる。無闇に解かないでほしい。

想う人がいますので婚約はしません、なんて我儘は言わず、静かに政務の間を後にする。

（それにしても、推し、とはなんでしょう。葬儀洞の土に刻まれていた記号と関係でも——、ん？）

考えごとをしつつ廊下を歩いていたら、行きすぎて、地下洞へ延びる部分まで来ていた。

我に返って引き返す。

「……あの方のお身体を引っ張り上げたときにや、間違はなく息してなかった」

だが、聞こえてきた洞窟管理役の声に、足を止めた。

洞の通気口を掃除したり蝋燭を補充したりといった日課の傍ら、ひそひそ言い合っている。

「おれは馬車の残骸を片つけたが、ひどい壊れようさ。馬も気の毒だったよ」

「やっぱり禁忌の蘇生魔法を使ったら、ニコも思わないか？」

「そうですねえ、あのゆるんだ道に突っ込んだのも、魔法でどうにかなるって過信したのかも」

あの方——公爵の処遇がもう広まっているのか。男たちはわたしに気づいてそそくさと散ったが、聞こえている。

『洞窟管理役には気をつけよ』

昨夜、公爵にそう念押しされた。気が落ち着かず、彼らを目で追う。

ニコと呼ばれた無造作な茶髪の青年は、見ない顔だ。

（事故の対応に当たらなかった者まで、一緒になって陰口とは）

いくら「仮死だった」と言い張ろうと、公爵の死の報はすでに王宮中を駆け巡った後だ。居合わせた者は禁忌破りを疑い続け、さっきのような噂も広まっていくだろう。

（閣下、あなたの指示に従いましたが、本当にこれで問題ないのですか？）

心配がぶり返し、ほとんど駆け足で客間を目指す。

角を曲がると、ちょうど兄がその客間に入っていくのが見えた。淡く頬を染めて。

急停止して、踵を返す。とんだ無料をしようところだった。

信頼も地位も守られたと、婚約者から聞くのがいちばんに決まっている。

震える指で、懷に忍ばせた万年筆の感触を確かめた。

（戯曲に触れたい……唯一、わたしのさみしさを埋めてくれる。あの日だって）

十年前、兄と公爵の婚約式の日。

立会人が続々と集まる王宮で、幼いわたしは身のほど知らず張り切っていた。

日頃から空想するのが好きで、台詞を考えては兄に読んでもらって遊んだ。今日は一念発起してわたしが舞台上に立ち、大好きな兄の婚約を祝えたらと思ったのだ。

しかし、上演洞内にせつせと並べた椅子は、すべて空いている。

『だれもわたしの創ったおしほいを観てくれず、さみしいです……』

そこに、舞踏の間へ向かう公爵が通りかかった。

涙を浮かべたわたしと目が合い、さすがに居心地が悪かったのだろう。長い腕を伸ばしてきた。

『戯曲があれば預かろう』

『ええと……ここにしかありません』

わたしは公爵の手を取り、巻き毛の頭にぼふんと乗せた。公爵は短く息を吐き、懷の万年筆――

黒檀に銀の先端のものを抜き出す。

『では、これを使ってしたためよ。紙に書きつけておけば、後で従僕にでも読ませられる』

わたしは素直に受け取り、誰かが洞に置いていった楽譜の裏に、祝いの台詞を綴りはじめた。

そして、大きな発見をした。

『あれ？ 紙だけでなくさみしさまで、埋まっています。……もしかして、かったか』

廊下の角に消えようとしていた公爵に尋ねる。

『これは魔法のまんねんひつですか？ 実はわたしは、魔法使いにあこがれているんです。みなが生あわせになれるなら、ふういんを解いてもよいと思います』

かつて王族が操れた魔法には、攻撃及び防御魔法――林業や農業に使っていたのを応用した――から、実用的な解錠魔法に治癒魔法、大がかりなものだと死者蘇生、時間遡行などもある。

逆にこんなささやかな、人の気持ちを明るくする魔法があったなんて。

『君もパルラディ派か。……今日のことは秘密にできるな？ ユーリイ』

禁忌破りの危険性をまだ理解していなかったわたしは、公爵の言葉に目を輝かせた。

『はい！ わたしたちふたりのひみつです』

名を憶えてくれていた喜びも相俟って頬がゆるむ。公爵は万年筆を返せとは言わずに去った。

――単に面倒だったのだと、今はわかる。

それでもあの日かった初恋の魔法は、ずっと解けないはまだ。



それから一週間、早まった婚儀に向けて手配や調整に奔走した。

夜、私室で葡萄酒片手にやっとひと息吐く。

（公爵を葬送したのが、遠い昔のようです）

エンドウアルド・ミロシユは禁忌の魔法使い——その噂を、公爵本人は否定しなかった。

結果、そうまでしてフセスラウ統治の片翼となる気概だと、婚儀を進めていいのかなおも懷疑的な者を抑え込んでみせた。

怪我也順調に回復し、客間にシメオンを呼んで議論したりしていたとか。

兄は心強そうだったが、わたしは割り切れない。

（禁忌を犯したのはわたしのため、と言っておられましたか……）

公爵は一度もわたしを客間に呼び寄せなかった。明日、ミロシユ領へ帰るとのことだ。

唯一事実を知るわたしに、説明の日を改めて設けてくれるのではなかったのか？

蘇生直後の、彼らしからぬ台詞、表情、行動の数々を思い返す。

（やはり、大きな魔力を要する蘇生魔法の後遺症で、錯乱されていたのでしょうか）

心身が回復するとともに、わたしへの態度ももとに戻ったに違いない。

あの甘い記憶を得られただけで充分——と自らを宥めた、ほんの三十分後。

「……っ？」

わたしはなぜ、公爵に組み敷かれているのだろうか？

葡萄酒は一杯にとどめ、蠟燭を消して寝台に入ったはず。

それが首にくすぐったさを覚えて目を開けると、月明かりに縁取られた公爵と目が合った。くすぐったいのは彼の黒髪^{またが}のせいだったのだ。

刺繍寝具の上から腰に跨られ、身動きが取れない。

状況を理解するや、心音が高まる。

「か、閣下。部屋をお間違えですよ。客間はこの階ではなく、」

「《夜這い^{よは}に來たのだ》」

夜這い？ フセスラウ一の美貌を誇る兄ではなく、わたしを？

（政略結婚の前に気の迷いが……いや）

そんな戯曲みたいな展開はありえない。勘違いしかけた浅ましさに頬を赤らめつつ、返す。

「蘇生魔法の後遺症が、癒えていないのですね」

「《違う。わからせてやる》」

違う？ よく見ると、わたしを見下ろす紅眼には光がなかった。

蛭人形のような表情を訝しむうち、骨ばった手が伸びてきて、わたしの寝間着の腰紐を解く。片手なのに淀みない、と感心している場合ではない。

「閣下……！ おやめください」

じかに肌を撫でられた。たとえ片想い相手でも、過ぎた接触到戸惑う。公爵の腕を押しとどめようとすけれど、うまく力が入らない。

——「わからせてやる」とは、こちらの動きを制限する、魔法の呪文なのか？
説明してもらおう前に、説明してほしいことが増えていく。

「ん、っ」

愕然とする間に、唇を重ねられた。

生まれてはじめての口づけ。

十年間想い続けた人の体温に、とろけそうになる。やわらかく、熱く、吐息が混ざり合う。

「は、あ……だ、め」

こうするのを夢見なかったと言ったら嘘になるが、実現してはならない。

公爵は兄の婚約者で、国の行く末を左右する婚儀を控える身。

精一杯の抵抗として顔を逸らした。ぶはっ、と呼吸を取り戻す。

「これ、以上は、どうか……」

掠れ声で懇願した。しかし公爵はわたしの気も知らず、身体のおちこちに唇を落としてくる。自身の上衣の胸もとがたわむのも構わず、舌先でわたしの臍のくぼみをつつく。

「ひあ」

痺れのようなものが背筋を駆け抜け、悲鳴が漏れた。未知の感覚で怖い。

ついには、下着に指をかけられる。

「あっ、許されません……っ」

このまま無垢な身体を公爵に暴かれてしまうのか。受容限界を超え、涙がこぼれた。

「くっ——強制力め。さすがBLゲームだ」

途端、公爵がのけ反る。

焦った声、それでいて達観した表情。人間味が戻ったものの、ちぐはぐだ。葬儀の夜のように、謎の単語も口走る。

『キョウセイリョク』……『げえむ』？

魔法関連らしきそれらについて訊いたら、わたしも禁忌を犯したも同然になるだろうか。

逡巡していると、公爵が丁寧な仕草でわたしの頬を拭った。

「この涙は私のせいだな。ユーリイを死なせないためにここに来たのに、『役』に動かされ、申し訳ない」

わたしは目を見開いた。涙も引つ込む。『役』とは、まさか。

おそろおそろ公爵を見上げる。狂おしいほどの熱を宿した瞳に見つめ返された。

「二度と強制力に屈しない。私は私の意思で……、推しのユーリイの死亡フラグをすべて壊す」

公爵は力強く宣言し、寝台を降りた。さっきわたしの肌をまさぐったのとは明らかに違う手つきで寝間着を直してくれる。

「君は死なないと、君も誓ってほしい。その相談に来たのだ」

（死なせない……、相談）

夜這い未遂で掻き回された思考を、なんとか整理する。

孤高の公爵がわたしに相談を持ちかけるなど、きつと最初で最後だ。できる限り役に立ちたい。ただ、まるでわたしが自ら死を選ぶかのような口ぶりなのが引かなかった。使命のない第二王子が生き長らえるのは、そんなに惨めに^{みじ}見えるだろうか。

「わたしは、死のうと思ったことはありませんよ」

「これまではな。だが今後一年のうちに、あと十一回ある」

ひとまず告げるも、切り返される。

それもまた具体的な数字が出た。十一回、なにがある？

（『死亡フラグ』とはおそらく、『死の危機』といった意味なのでしょう）

公爵が蘇生以後に使うよくわからない単語をひとつ、訊く代わりに頭の中で噛み砕く。そこに露台から夜風が吹き込んで、公爵の長髪を煽った。

（――！）

一瞬で十歳老け込んだように見えた。胸騒ぎがして、起き上がる。

「死なないと誓う他に、わたしにできることはありませんか」

「……。私の『こうしてくれ』『こうしてはいけない』という頼みを聞いてほしい」

「たとえば葬儀洞で、廊下に出なかったように？」

「いかにも」

眉をひそめざるを得ない。死の危機に対して、小さな行動すぎやしないか。そもそも。

「あの場でペトルと鉢合わせするのが、わたしの死につながったとは思えませんが……」

「『悪役』の私の禁忌破りに与^よした、と王太子の護衛に疑念を抱かせる。それは第二王子である君の立場を悪くする」

（魔法を使ってわたしが兄と争うかも、と？ やはり突拍子もないお考えです）

公爵はすらすら説明してくれるが、どうにも納得しがたい。

「ゆえに、私は仮死だった、ということにしたのだ。とはいえ」

そんなわたしの気持ちを知ってか知らずか、公爵が続ける。

「前回、私も疑問を抱いた。なぜずっとユーリイを救いに来られるのだろう、と。情けないが、君が無事に一年生きられる条件は未だ手探りだ。そこで今回は、君と手を組む選択を試みた」

ますます引つかかった。前回？ ずっと――？

そこまで聞いたとき、公爵の仕立て直した上衣が小刻みに揺れているのに気づいた。

公爵の手が、震えている。蘇生直後のように。なにかを耐えるかのごとく。

わたしは思わず公爵の手を握った。

「わかりました。あと十一回の『死亡フラグ』とやらを、共に乗り越えましょう」

正直、説明をすべて理解できたわけではないが、公爵は非合理的なことはするまい。わざわざ第二王子を守る理由があると見た。

（わたしが死ぬなど、わたしがいちばん信じられないけれど）

わたしだけは信じてあげねばならない気もした。

「と言えますか。今回死にかけたのは、閣下のほうですよ。ご自愛くださいね」さらに、出すぎた真似と思いつつも一言付け加えると、公爵の表情が和む。

こうして慈しむように見つめられるのは、はじめてだ。頬が熱くなる。うつむくものの、手を引き戻しそびれた。

「ありがとう。私も今度こそ君を守ると誓おう」

思わせぶりに握り返される。その手の震えは止まっていた。

らしさを取り戻した公爵は、上衣の裾をひらめかせて私室を出ていく——と思いきや、不意に立ち止まり、まっすぐ引き返してくる。

「もう一回だけ」

「っ!？」

まだ上体を起こしていたわたしを、ぎゅっと抱き締めた。巻き毛に鼻を埋め、すうはあと深呼吸して、満足した様子で去る。

私室に静寂が戻った。

（今は、まさか……）

居ても立つてもいられず、絨毯を突っ切り、象形彫刻を施した執務机に縋りつく。

二段目の抽斗の鍵穴に、いつも持ち歩いている万年筆を挿し込んだ。

（まさか、わたしの『夢恋愛戯曲』を読まれたのでは!？」

これは職人に特注した錠だ。だが、鍵にしている万年筆と同じ意匠のものを、公爵がもう一本

持っていてもおかしくない。しかもこの一週間、兄の婚儀の準備でほとんど私室を空けていた。

よくない想像とともに、わたしの秘密を隠した抽斗を引く。

薄水色の織物書皮をかけた手記——と見せかけた、自作の戯曲が変わらずそこにあるのを確かめて、はああと安堵の息を吐き出した。

わたしは『もし公爵との恋が叶ったら』という夢物語を、十年にわたって書き続けている。

夢想の中の想い人は、わたしに甘い言葉をかけてくれる。強引に唇を奪いもする。先ほどのように、逢瀬の最後にわたしを抱き締めることもある……

「いい歳にもなって」

自嘲の笑みが漏れる。

でも、紙に発散することで恋心を抑し込め、第二王子としての道を踏み外さずにこられたのだ。（とにかく、公爵がわたしの夢戯曲の『役』を演じたわけでなく、単なる偶然の一致なら……どうしてわたしに触れてきたのでしょうか？ 相談には必要ありませんよね）

強制力、などと言っていたけれど。男の本能という意味か？ わたしに対して？

そっと唇を押さえる。公爵の温もりが残っている。秘蔵の戯曲が上演されたかのような事態に、わたしは嫌悪どころか未知の快楽を覚えた。

それこそ、本能的に。

「本当に、はしたない……」

顔を覆う。それでもなお、公爵が口にした台詞の数々に甘く苛まれた。

『もう君を喪いたくない』『ユーリィを死なせないためにここに来た』『私も今度こそ君を守ると誓おう』――

公爵は残酷だ。自分の言動がどれほど周囲に影響を及ぼすか、わかっていない。婚約者の弟ではないわたしを、徒に乱さないでほしい。

万年筆も自作の戯曲も、葬儀の後で洞の隅に深く埋めてしまうつもりだった。なのに、公爵の蘇生によって手放しそびれた。

かと言って、蘇生以降与えられた台詞を書きつけてみる気にもならず、持て余している。

結局、今夜も抽斗に隠し直す。

「公爵が生きておられること以上に、なにを望みましようか」

固く鍵をかけ、半ば自分に言い聞かせた。

公爵が禁忌を犯したのは驚いたが、失望はしていない。なにせ幼い頃は魔法使いに憧れていた。今、公爵は生きている。

わたしにそれ以上を望む権利は、ない。

（来月の婚儀を区切りに、この片想いは終わりにしましょう。第二王子として兄と公爵を支え、国のために生きていくのです）

わたしの死亡フラグを壊していく中で、間違って想いが募らないよう、決意を新たにした。

公爵が、遥かに悲壮な決意を秘めているとも知らずに。

第二章 婚儀の長い夜と、大いなる魔法

王宮で最も広い、舞踏の間。吹き抜けの天井に描かれた『始まりの魔法使いたち』の絵が、露台から射す月光に淡く照らし出される。

（今日も雨でしたが、夕方に上がってよかったです）

緑の薫^{かほ}りを乗せた涼しい風が吹く中、公爵と兄の婚儀が始まった。

主役の兄が、瞳の色に合わせた薄紫色の式服^{ドレス}で歌い踊る。上衣の裾を女性用礼服と同じく踝まで伸ばしてあり、動くたびに綺麗になびく。

戯曲を書くばかりのわたしと対照的に、兄は歌も踊りもうまい。

結い上げた銀髪が、燭台^{しょくたい}の光にきらめいた。ほんのり葡萄酒色に染まった頬が幸福そうで、来賓^{らいひん}はもちろん雑務に当たる洞窟管理役たちの耳目をも集めている。

「普段にも増してお美しいこと」

「……」

しかし濃青の礼服を着たわたしは、兄をまっすぐ見られない。公爵の夜這いに抗い切れなかった後ろめたさが、日を追うごとに大きくなっていった。

（今日こそ、公爵への恋心を断ち切らねば）

当の公爵は、しばらく兄の隣を空けている。どこでなにをしているのやら。先月、共に死亡フラグを乗り越えようと誓ったものの、わたしに指示の書簡を寄越すわけでもなかった。

(よく考えてみれば、一年間に十二回も死の危機が訪れるなど、王族の力が弱まり内情不安定なフェスラウといえど大げさです)

実際、特に身の危険もなく今日を迎えた。「ユーリイを死なせない」という台詞の重さは薄れつつある。

恋を終わらせるには、それでいい。

(ではなぜ公爵は婚約者の弟を構うのか？と言われたらうまく答えられませんが……、おや)不意に、舞踏の間の人混みがふたつに割れた。

真ん中を悠然と歩いてくるのは——他でもないエドワード公爵だ。

新郎のために仕立てられた式服ではなく、いつもの漆黒の礼服に身を包んでいる。不自然なのに堂々としており、貴族たちが踊りを止め、道を譲ってしまうのもわかる。

洞窟管理役は仕事も忘れて目を丸くした。楽隊の演奏も止まる。

(いったいどうされたのでしょうか?)

訝しむ間に、公爵は王族が集う壇の前まで来て、跪いた。

「国王陛下。私は今このときを以て、コンスタンティネ王太子との婚約を破棄させていただきます」

朗々と発された台詞に、耳を疑う。

婚約、破棄？ 謎の単語は交じっていない。つまり正気ということ？

誰もが啞然とする中、兄が気丈にも一歩前へ出た。

「理由を話してください、閣下。でなければ万一にも受け入れることはできません」

「いかにも」

公爵は厳めしく頷く。あたかも弁明を求められるのを待っていたかのように。

「まず、私と王太子との間に愛情はありません」

第一の理由に、たちまち兄がよろめいた。慌てて華奢な背中に寄り添う。

さしものわたしも義憤が湧いた。王族や貴族にとって政略結婚はめずらしくない。なのになぜ今になって兄を突き放すのか。

壁際に革鎧姿で控えるペトルも、怒りで短髪を逆立たせている。

『公爵は家柄こそ立派ですが、王太子殿下を幸せにしてくださいませかね』

と、彼はずっと兄を気にかけていた。

公爵は意に介す様子もなく話続ける。

「次に、私が将来王婿となることでミロシユ家に権力が偏るのでは、という懸念があります。そうだな？ 宰相子息シメオン」

みながシメオンを振り返った。三十歳にして次期宰相の呼び声高い彼は、不測の事態にも動じず鼻眼鏡を押し上げる。

「確かに、フセスラウのためにならないかと」

はつきりとは触れないが、公爵には禁忌を犯した疑いがあるのも瑕疵かしと言いたげだ。

（客間でおふたりで話し合って、納得ずくと思っていました）

シメオンの言に、公爵が再び頷いた。国のために土壇場どたんばで辞退するわけか——と思わせて。

「なにより、私には守りたいものがあるのです」

守りたいもの。刹那せつな、公爵と視線が絡む。

「……っ」

剣で身体を貫かれたかのようにだった。何重もの意味で、胸が痛む。

兄を案じて。公爵がこんな仕打ちををすると思わなくて。……わたしの恋心が、兄の婚儀を台無しにしてしまった気がして。

わずかな静寂ののち、兄が体勢を立て直した。

「そこまで言うのなら、破棄を認めましょう」

要人の手前、凜と立っている。ただ頬は血の気を失って真っ白だ。

舞踏の間は大騒ぎになる。公爵が立ち上がって踵を返す。

（待って。わたしは納得できません）

反射的に彼を追いかけた。

廊下は人が多い。通用口から外へ出てしまう。王宮は斜面に広がる構造ゆえ、一階以外にも出入口があるのだ。

山毛櫨ツツの木々の下、いくつも通気口が覗く坂道を駆け下りていく。

考えはまとまらない。でも、公爵に一矢報いないと気が済まない。

（あなたが兄を尊重するところを、好ましく思っていたのですよ……！）

ともすると夜闇に紛れかねない長身瘦躯を、王宮前の馬車待機場に見つけた。ミロシユ家の新しい馬車に乗り込もうとしている。

「閣下！ はあ、はあ、ミロシユ公！」

息も切れ切れに呼ぶと、公爵は優美な所作で振り向いた。汗だけで巻き毛を跳ねさせるわたしのため、何歩か引き返してくる。

「そんなに可愛く走って、どうした？」

どうした、だと？ 冗談ではない。

「こちらの台詞です。どうして来賓たちの前で、兄との婚約を……っ」

言葉を継げない。まるで自分が婚約破棄されたみたいに悲しみが押し寄せる。

わたしたち兄弟とも、歳上の親戚である公爵に憧れを抱いていた。そして兄は、政略結婚であっても真の愛を築こうとしていたのだ。その想いをなぜ顧みてくれない。

「婚約破棄の理由か。私が『王太子の婚約者』なのも、『コンスタンティネに慕われたまま』なのも、君の死亡フラグであるゆえだ」

「わたし、の……？」

声が掠れた。なにを言っているのだろう。それこそつながりが見えない。

「これでフラグをふたつ壊せた。私自身は悪役公爵の定めで破滅しても構わないが、君を守れなくなるのは困る。我ながらうまく演じられた」

満足げに語る公爵を、まじまじ見る。

「悪役」、「破滅」、「君を守れなくなるのは困る」。普段と異なる、理解しがたい言動だ。蘇生魔法によって消耗した魔力が、まだ回復していなかったのか。

簡単には割り切れないが、仕方ない。短く息を吐く。

「公爵には事故の後遺症が残っており、婚約破棄は無効と父に伝えます」

「待て。婚約破棄は明確に私の意思だ」

しかしすかさず否定された。それもまったく悪びれない。

「私が禁忌を犯したのは、ユーリイのためだと言ったろう」

念を押すような眼差しまで向けられる。

わたしの死の危機がいくつも控えているというのは、誇張ではないらしい。だとしても、だ。

「だとしても、あのようなやり方は看過できません。王宮にお戻りになって、兄に一言かけていただけませんか」

真摯に訴えると、公爵は息だけで笑った。

「八回目の君も、兄のために怒っていたな。七回目の自分の政略結婚には、ちっとも怒らなかったのに」

「は、い？」

「私は変わってしまったが、君はいいところが変わらなくて、癒やされる」

公爵の紅眼は本当に和んでいて、にもかかわらず胸騒ぎがした。

（八回目と、七回目？　これまでわたしと話した回数でしょうか。いえ、閣下が数えているとは思えません……それに、わたしは結婚などしていない）

考えることがありすぎて紅潮するわたしの頬を、公爵がするりと包み込む。

「舞踏の間で婚約破棄を告げたのは、君を令嬢方と踊らせたくなかったのもある」

「……っ！」

思わせぶりの理由も挙げられ、頬がさらに熱くなった。いちいち反応してしまつて悔しい。

確かに彼の言うとおり、母が見繕ってくれた婚約者候補と踊るという今夜の義務は立ち消えた。

（それを、わたしが感謝するだけでも？）

フセスラウの安寧のためだったのに。

公爵の手を払い、きつと睨む。

「わたしたちを弄ばないでください。兄の、王太子としての覚悟はどうなるのです」

一方の公爵は、自分の手とわたしの顔を交互に見た。

「新規供給……」

などと独り言ちて微笑む。

また、見慣れない笑顔だ。つい見惚れてしまい、唇を噛み締めた。

兄弟の誇りを傷つけられても公爵を嫌いになれない自分に、つくづく呆れる。

公爵のほうはすぐ笑みを引つ込め、掴みどころのない澄まし顔に戻った。

「問題ない。『悪役』の私よりコンスタンティネに相応しい男——ゲームの主人公がいる。彼が傷心の王太子を慰めるだろう。もともと今夜、彼にコンスタンティネを攫われる予定だったのだ」
（げえむ、の『主人公』？ いったい誰のことでしょう？）

戯曲作家めいた彼の言い回しに、眉根を寄せる。

すると、できた皺を指先で撫でられた。

「その目で見てもらうのが納得しやすいか。ふたりは今、上演洞にいる」

わたしを追い払う口実には聞こえない。舞踏の間に置いてきた兄も気がかりではある。

夜風が喧騒を運んでくる。婚儀が中止となったため、帰領する者が馬車待機場に続々と現れたのだ。このまま話し続けていたら野次馬に囲まれかねない。

「……そこまでおっしゃるなら、行ってみましょう」

釈然としないながらも、ひとり上演洞へ足を向けた。

（おや、あの目を惹く御方は）

わたしと逆方向に進む人波に、パルラディ国王太子ステヴァン殿下の姿があった。

明るい金髪が麗しく、広い背中が頼もしい。正装の白い軍服が映える。わたしの六歳上、そして王太子だけあって、灰色の瞳には風格が漂う。

「コンスタンティネ……」

なにやら口が動いた。

（休戦の象徴として参列していただいたのに、この騒動をいかが思われたでしょう）

当初、フセスラウとパルラディはひとつの国だった。それが始まりの魔法使いたちの仲違いによって分裂し、長い時が経った。

王族同士が交流することで両国民の歩み寄りも進むはずが、反対に呆れられてしまったかもしれない。

第二王子のわたしでも、少しは挽回できるだろうか。一行に近づき、声をかける。

「ステヴァン殿下。はるばるご参列いただいたにもかかわらず、申し訳ありません」

「ユーリイか。きみが謝ることはない」

ステヴァン殿下は、気品溢れる笑みを浮かべた。彼は昔からわたしにも気安く接してくれる。

「それより、コンスタンティネのそばについてあげなさい。地下洞方面へふらふらと歩いていった。私より気心の知れたきみのほうがいいだろう」

地下洞、と聞いてどきりとした。公爵の言ったとおりだ。

殿下に礼を言い、再び小走りになる。

王宮内には入らず、通気口から上演洞を見下ろしてみる。念のため、洞窟管理役がかけた雨避け織布に身を隠して。

洞の中ほど、一段高くなった舞台の端に——月明かりを集める銀髪を見つけた。

本当に、兄がいる。薄紫色の式服のまま、力なく腰かけている。

（御加減がよくないでしょうに、おひとりとは）

すっ飛んでいきかけたものの、すんでのところで踏みとどまった。

兄の横に、誰かいる。

ペトルでも従僕でもない。生成りの立ち襟の長衣——洞窟管理役の仕着せ姿の男だ。

あれが、『主人公』？ 兄とそう歳が変わらなく見える。肩が逞しく、包容力はあるそうか。などと観察していたら、兄が男のほうを向く。

「付き添わなくて結構です、ええと……」

「ニコです。先々月、洞窟管理役に雇われました」

上演洞なので声が壁に反響し、ふたりの会話の内容を聞き取れた。

（ニコという名、どこかで聞き覚えが。ああ、公爵の事故の際に噂話していた者ですね。先ほど舞踏の間でも、驚いたように公爵を見ていました）

「そう。婚儀では驚かせてしまいましたね」

兄は洞窟管理役相手でも気取らない。

ニコはというと、茶髪をふるふる振った。

「いいえ。でも——はい。コンスタンティネさんのような美人に恋しない男がいるってのは、驚きでした」

妙な沈黙。次いで兄が噴き出す。

「自分がなにを言ったか、わかっていますか？」

「えっ、言葉遣い間違っていました？ 俺、洞窟管理役の先輩にいつも怒られてて」

ニコは無邪気に灰色の瞳を見開いた。求愛の言葉を吐いた自覚がないらしい。でも憎めない。

「ねえ。なにか楽しい話を聞かせて」

兄はそれまでより少し明るい声で、ニコに言った。それは兄がわたしによくする頼みだった。

ニコは望まれるまま話した。

洞窟管理作業中にお腹が減って、野生の李（プル）を摘み食いしたのがシメオンにばれたこと。

騎士団員から武器収納洞にしまう剣を預かったら予想以上に重く、あやうく落としそうになったこと……

わたしのつくり話と異なり、本当の話だ。それによって兄の自然な笑顔を引き出す。

「あー、月が綺麗です。流れ星も光ったかも？」

と思うと、話題が飛んだ。『流れ星』に見えなくもない銀髪をさっと引っ込めたわたしにも、その理由はわかった。

くすくす笑っていたはずの兄が、泣いている。

やはり婚約破棄が堪えたのだ。和んだら感情の武装が解けてしまったに違いない。

注意深く顔を出し直すと、一度見ないふりしたニコが、兄の肩を抱き寄せたところだった。

『彼が傷心の王太子を慰めるだろう』

公爵が言ったとおりの展開が、目の前で繰り広げられている。

公爵と兄の婚約は、公爵の意思で破棄された。兄には、別の男が寄り添ってくれている——

とくん、と拍動が乱れた。

（わたしは……まだ公爵を好きでいても、いいのでしょうか）

つい、そんな考えが過る。

十年間恋心を秘め、今日を以て片想いを終わらせようとしていたのは、ひとえに公爵が兄の婚約者だからだ。

その障壁が、思わぬかたちで取り払われた？ 突然の環境の変化をうまく呑み込めない。

（いえ、のうのうと喜ぶことはできません）

だがすぐ首を振る。兄が傷ついたし、フセスラウの未来も婚約破棄によって混乱するだろう。

それでも公爵だけは落ち着いていた。なぜか。

（公爵はきつと——未来予知魔法を使えるに違いありません）

わたしは場違いな恋心を抑え込み、ひとつの仮説を導き出した。

葬儀洞にペトルが来ること。臨時議会の議題。兄をニコが慰めること。これらをすべて知っていたのも辻褄が合う。であれば。

（フセスラウの未来も見通せるはず）

未来予知について、公爵に詳しく聞きたい。

魔法書の類は、魔力封印とともに書庫洞の閉架に押し込まれた。幼い頃、兄とこっそり忍び込んで読んだ魔法使いの冒険譚のみでは、知識が足りない。

兄をいったんニコに任せ、坂道を取って返す。

国のため、第二王子としての務めだ。諦めるのがまたも延びた恋心が望むからでは、ない。

辿りついた待機場には、馬車はもうまばらだった。

（公爵も発ってしまったかも。とげとげしい態度を取ったきりですし……）

そう都合よくいかないかと、肩を落とす。

「ユーリイ。おいで」

だが、ひそやかに名を呼ばれた。

振り返ると、馬車内で公爵の紅眼が妖しく誘っている。

（まだいてくださった）

小走りで乗り込む。途端、扉を閉められた。さらには杯を差し出される。

「行ったり来たりして疲れたろう。はい、葡萄酒」

「い、え？ 結構です」

喉が渴いてはいたものの、公爵らしからぬもてなしに驚き、固辞してしまった。

「……そうか」

残念そうな横顔も気になるけれど。まずは国のための問いを切り出す。

「それより、伺いたいことがあります」

「コンスタンティネとニコを見ても納得できなかったか」

「いえ。むしろ閣下の特別な力について、詳しくお聞きしたく」

「私の特別な力？ 土下座くらいだが」

「ご謙遜を。閣下は、魔法で未来予知もできるのでしょう」

勢い込むわたしと裏腹に、公爵は数拍溜めたのちに頷いた。

「君に言わせればそうか。確かに私は、これからなにが起こるか知っている」

やはり。彼は蘇生以外にも大がかりな魔法を使えるのだ。

「では、フセスラウの未来を教えてくださいませんか。誰にも口外しません。政務にのみ活用します。国を背負ってゆく兄の負担を、少しでも減らすためです」

「……。さまざまな選択肢があつて、どの未来に行きつくかは断言できない。それに、私にとって国よりユーリイの命のほうが大事ゆえ、話せないこともある」

公爵が言葉を選びながら答える。断言できない、話せない、ときた。

「第二王子の務め」を得た昂揚がみるみる萎む。代わって複雑な気持ちがあふくんだ。

（わたしの命が国より大事なわけがありません）

それでは、未来は不確定にもかかわらず、あんなかたちで婚約破棄したのか？

「閣下は、禁忌を犯したご自身を『悪役』と称されますが。魔力の封印を解くと、人が変わったようになるのですか？」

義憤まで復活し、恨み言が口をつく。

公爵が小声で「鋭いな」とつぶやいた。今日という今日はうやむやにさせない。

「婚約破棄とわたしの死の危機の関係も、説明してください。あのやり方以外なかったのですか」
積もりに積もった疑問をぶつける。

客室にはふたりきりで、逃げ場はない。公爵は観念した様子で口を開いた。

「まず、先月の馬車の滑落事故で、君の知る『公爵』は死んだのだ。もともと、彼の記憶はある。コンスタンティネへの恋愛感情は本当になかった」

ようやく得られたひとつめの返答はしかし、難解だ。

（わたしはこの十年、公爵を遠くから眺めるのみでした。『君の知る公爵は死んだ』とは、今はわたしの知らない一面が出ている、という意味でしょうか）

考え込む間に、公爵が続ける。

「婚約に関しては、実は先にコンスタンティネから婚約を解消したい旨の書簡が届いた。本人に訊いたら覚えがないと嘯いたが、彼も私との間に愛がないと薄々気づいている」

「兄から……？ ありえませんか」

信じがたい情報に義憤が吹き飛び、呆然とするほかない。今夜は——今夜も、驚きの連続だ。

「それでもない。婚約したままだと、いずれ彼から婚約を解消される。そして君も私も死ぬ」

「閣下、も？」

畳みかけられ、眩暈がした。おそろしい。その未来だけは避けたい。

「今回はそうならない。私が婚約破棄したから」

額を押さえるわたしを見かね、公爵が言い切る。ついさっき、未来はわからないと言ったのに。でも、気まぐれな優しさであっても縋りたかった。二度も公爵を葬送したくない。

公爵がわたしを窺いながら話を再開する。

「私たちは王族ゆえ。ちなみに、穏便に婚約解消し、コンスタンティネが私に想いを残すかたちだと、後々ややこしいことになる。優しい君は……とぼっちりで死ぬ」

「なんですか、とぼっちりとは」

生死に関わると思えない単語を指摘すると、公爵は釈明の代わりに微笑んだ。それでいてさみしそうで、強く問い質せない。

ひとまず、兄への仕打ちに部外者のわたしがこれ以上口を出すのは控えよう。

「兄との婚約を破棄しなければ閣下にも死の危機がある、のは理解しました。わたしの政略結婚というのも、予知された未来のひとつですか？」

「……あれは失敗だった」

話題を移すや、公爵が渋い顔になる。実際には起こっていない話なのに失敗と決めつけられた。いくら使命を持たない第二王子とはいえ、結婚生活くらいしっかり果たせる——、だろうか？

公爵への恋心を捨てきれないままで。

彼の唇の感触は忘れていない。兄の婚約者でなくなった公爵に迫られたら、今度こそ拒めないかもしれない。

今だって狭い密室にふたりきりなのを急に意識してしまい、そわそわと座り直す。

「……またわたしを弄んで」

「それは冤罪だ。私はこう見えて、弄ぶなどという上級テクニクは持ち合わせていない。ただ推しの君に生きて、幸せになってほしいのだ」

公爵が言葉尻を捉え、射すくめてきた。あまりにも必死な眼差しに、わたしは瞬きすらできない。
(推しとは……好き、とは違うのでしょうか)

数拍見つめ合う。公爵が「申し訳ない」と先に目を逸らした。

瘦躯がなんだか心許なげで、振り払った先ほどと逆に、公爵の手に手を添えて告げる。

「国の安寧が、わたしの幸せです」

あなたと結ばれたら幸せです、とは言えない。第二王子との恋愛は公爵になんの利点もない。

公爵が二度も死なずに済むなら、それでいい。

「君はいつも、そうだったな」

公爵は、第二王子がなにを言う、と嗤わなかった。それだけで、背中を押されたように感じた。

「明日からわたしはどうすべきか、助言だけでもいただけませんか？ フセスラウの安寧のために

も、兄を支えて差し上げたいのです」

婚約破棄はもう取り消せない。それを踏まえての立ち回り方を仰ぐ。

公爵は指先で唇をなぞりつつ思索した。

「安寧……。スローライフエンドを、久しぶりに望んでも許されるか」

(『すろらいふえんど』？ 魔法の呪文のようです)

「四回目から八回目のように原作を変えすぎても、強制力が働く。十二回目はほぼ干渉しなかったのが、あの日までは奏功したと言える。サブストーリーも考慮すれば——」

わたしは口を挟まず、公爵の低い声を堪能する。

何回目というのは、節目での選択を変えた場合の未来予知の回数とみた。婚約破棄により将来の王婿の座を手放すにもかかわらず、フセスラウのために魔法を駆使していたのだ。

国よりわたしの命のほうが大事などと言われて揺らぎかけた信頼が、回復する。

同時に、公爵の結論が出たらしい。

「原点でいこう。ユーリイには、優しすぎずにいてもらいたい」

「？ 別にわたしは優しい人間ではないですよ」

「いや、君はいちばん優しい」

伶俐な口角が片側だけ持ち上がる。よく公爵がする表情で、これまでの公爵ならおおよそ口にしない台詞を吐く。

優しい、だなんて。面映^{おもは}ゆくてうつむいた。

蘇生を機に見えはじめた公爵の新たな一面は、不思議に思うが嫌ではない。第二王子ながらに国の安寧を願う気持ちを確認してくれたのも、嬉しい。

「それと、その礼服がとてもよく似合っている。銀髪とのコントラストがいい」

「えっ……それほど、でも」

極めつけに、舞踏会の参列者で唯一、わたしの装いを褒めてくれた。今日は兄の婚儀なので当然だが、今日でなくともみな美しい兄のみを褒める。両親でさえも。

ふと両親の顔が脳裏を過った。途端、ゆるみかけた頬が引き攣^つる。

「待ってください。兄との婚約が解消となった場合、閣下もお亡くなりになるとのことでしたが。

もしや父が激怒してミロシユ家取り潰し……魔爵や追放になってしまっているではありませんか？」

それ以外に、若き公爵の死につながる要因は思いつかない。謹慎や幽閉では済まないのだ。

「え、いや」

公爵は、自身とわたしの身体の間で中途半端に両手を浮かせたまま、黙り込む。

わたしを怖がらせないよう、未来予知の詳細を濁^{にご}したに違いない。

「婚約破棄でも、同じことが起こりうるでしょう。なにか対策されているのですか」

心配が募る。わたしとて義憤で公爵を追ってきた。兄が公爵に失望しなければわたしに死の危機があるらしいが、両親は失望どころか、期待の反動で激高してもおかしくない。

「そこは、君がなんとかしてくれるだろう？」

さらりと頼まれ、絶句した。これは——両親の説得に当たらせるために、馬車でわたしの戻りを待ち、婚約破棄の意図を問わせて聞かせたとしか思えない。

「そんな大役、わたしに務まるはずがありません」

「できるとも、ユーリイになら」

力不足を表明するも、蠱惑的な笑みに捌^かめ捕^とられ、反論できなくなる。

役割を与えられ、舞い上がってしまった。彼は国の未来を惑わせた張本人なのに。公爵は、わたしがいちばん喜ぶことを知っている。それとも魔法で見透かしたのか。

（わたしの恋心は、お見通しではないですね？）

おずおず公爵を見つめる。

油断すると義憤や心配を掻き消してしまうほどの恋心を捕まえようとするかのごとく、公爵の手がわたしを引き寄せる。すううはああと長めに深呼吸された末、解放された。



ミロシュ領は、王宮の南方に位置する。馬車で半日の距離だ。

起伏ある林道を辿っていくと、質実な城が現れる。

「一週間ぶりだな。ようこそ」

領主——エドゥアルド公爵が、直々に出迎えてくれた。

無彩色の礼服姿。それで魅力が損なわれるどころか、かえって色気が増す。私情を挟まないようひそかに深呼吸した。

「この度の事情聴取次第で、貴家の処遇が決定します。ご協力ください」

先週馬車内で案じたとおり、婚約破棄は婚儀での弁明を以て幕引き、とはいかなかった。

王太子の婚約者でなくなった公爵は政務を離れ、領地に滞在している。わたしは彼を『なんとかする』べく訪ねてきたというわけだ。

背後でこちらを窺う公爵の両親や執事たちは、一縷の望みにかけている様子だ。予想だになかったろう心労で、みな顔色が悪い。

(わたしも綱渡りでした)

事後処理が山積みの中、元凶である公爵に罰を望む派閥を宥めるのに苦勞した。

婚約破棄の真意を聴取して処遇を決める流れに、やつとのことを持ち込んだ。

王太子の心情を思えば公爵を王宮に入れたくない。かといって彼の領地へ出向くのも癪だが、第二王子が引き受けるというなら——と、聴取役になった。

(よくも悪くも第二王子、といったところでしょいか)

「さあ、こちらへ。ふたりきりで話そう」

公爵は、王宮での働きを^{ねんごろ}労うかのように案内してくれる。

ただ、妙にわたしの背後や足下や頭上を気にしている。石階段を上がるに至っては、わたしを支えるようにびたりと一段後ろをついてくるほどだ。

「あの、自力で上れますゆえ」

「む、そうか」

わたしとしては、公爵の体温や息遣いを間近に感じるほうが、歩がままならない。

適切な距離を取ってもらい、ようやく最上階の私室に着いた。

「無事に着けた」

と思ったら後ろから抱き締められた。巻き毛に鼻先を擦りつけられる。なんとも大げさだ。

「か、閣下。『強制力』に屈しないのではなかったのですか」

拘束は強くないのに逃げない自分を棚に上げて諫めると、公爵はばつが悪そうに手を引いた。

「……いかにも」